研究主題「音楽的な見方・考え方を働かせて身の回りの音や音楽と関わる生徒の育成－生徒が音楽科の学習の意味や価値を自覚できる指導の工夫－」

東京都教職員研修センター研修部専門教育向上課
葛飾区立水元中学校　教諭　上野　和久

第１　研究のねらい

中学校学習指導要領解説音楽編（平成 29 年７月）には、音楽科の目標について、「音楽的な見方・考え方を働かせた学習活動によって、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを目指すことである。」と示されている。また、「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関する目標の趣旨では、「音楽科の学習に、また身の回りにある音や音楽に生徒が主体的に関わっていくことのできる態度の育成」を目指していることが示されている。

しかしながら、都内公立中学校音楽研究会等では、課題として身の回りの音や音楽との関わりを広げたり深めたりすることを挙げており、生徒は意欲的に授業に取り組んでいるものの、授業改善が必要だと考えている。生徒が音楽の学習で得た知識を生かして、日常生活で音楽への興味・関心を広げたり、日常生活で音楽を聴いて感じたことを授業で聴いた音楽と結び付けて学びを深めたりするなど、身の回りにある音や音楽に主体的に関わることができれば、音楽によって人生を豊かにすることにつながると考える。

そこで、本研究では、目指す生徒像を身の回りの音や音楽と豊かに関わる生徒とした。身の回りの音や音楽と豊かに関わる姿とは、音楽的な見方・考え方を働かせて主体的に多様な音や音楽に関わっていくことだと考える。このような生徒を育成するためには、生徒が、授業で学んだことを基盤として身の回りの音や音楽との関わりを広げたり深めたりすることを通して、音楽科の学習の意味や価値を自覚できるようにすることが必要である。

これらのことから、本研究では音楽の授業の学びと日常生活の音や音楽との関わりをつなぐ指導の工夫を開発して、音楽科の学習の意味や価値を自覚できるようにすることで、生徒は、自ら学びや経験を積み重ね、身の回りの音や音楽と豊かに関わるようになると考え、本主題を設定した。

第２　研究仮説

音楽の授業の学びと日常生活の音や音楽との関わりをつなぐ指導の工夫により、音楽科の学習の意味や価値を自覚できるようにすることで、生徒は、身の回りの音や音楽と豊かに関わるようになるだろう。

第３　研究の内容と方法

１　基礎研究

(1) 検証授業で目指す生徒像の明確化

研究仮説を検証するため、中学校学習指導要領解説音楽編（平成 29 年７月）を参考に音楽的な見方・考え方を働かせて音や音楽と関わる生徒の姿を明確化した。検証授業で目指す生徒像は、音楽を形づくっている要素を思考・判断のよりどころとして歌唱表現への思いや意図をもったり、楽曲のよさを味わったりしている姿とした。

(2) 音楽科の学習と生活や社会との関わりについての先行研究の分析

音楽科の学習と生活や社会との関わりについて先行研究の分析を行った。生徒が音楽科の学習と生活や社会との関わりを実感することについて課題があり、また、この分野における教員の実践事例が少ないことが分かった。

２　調査研究

(1) 調査の概要

基礎研究を受け、具体的な生徒の実態や教員の課題意識を捉えるため、調査研究を行った。令和２年９月に、都内公立中学校１校の第２学年生徒105人及び都内公立中学校21校の音楽科教員21人を対象とした質問紙調査を行った。

(2) 調査結果を基にした分析と考察

生徒を対象とした調査では、音楽の授業以外で音楽の授業で学習したことを想起するという生徒の割合は回答した生徒全体の51.9％だった。「想起する」と回答をした生徒に対し、実際にどのようなことを想起するかを質問したところ、「授業で取り組んだことのある曲だ。」と回答した生徒の割合が51.8％で、授業で学んだリズムや音色などの要素に着目すると回答をした生徒の割合は10％程度に留まった。また、音や音楽を聴いて自分が感じたことについて、なぜそう感じるのか考えることがない、またはあまりないという生徒の割合は69.0％で（**図１**）、授業の学びを生かし、音楽的な見方・考え方を働かせて音や音楽と関わることに課題があることが分かった。

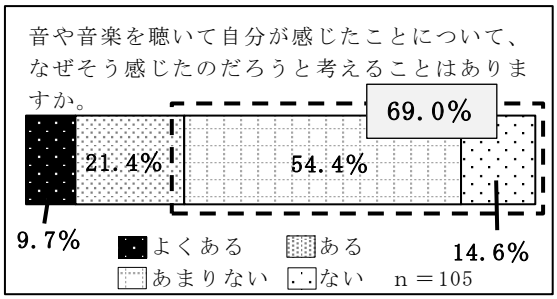

図１　生徒対象調査質問

教員を対象とした調査では、音楽科の学習と生活との関わりや、音楽科の学習の意味や価値を生徒に自覚させる指導について課題を感じている教員の割合は回答した教員全体の71.4％だった。

教員の指導の工夫によって、生徒が、音や音楽を聴いて自分が感じたことについて音楽的な見方・考え方を働かせて考えることができれば、生徒はより身の回りの音や音楽との関わりを広げたり、深めたりできると考える。

３　開発研究

(1) 「授業と日常生活をつなぐ工夫」の概要

これまでの基礎研究及び調査研究から、生徒が音楽を形づくっている要素と曲想との関わりについて授業でも日常生活でも考えるようになる指導の工夫を開発した。これを「授業と日常生活をつなぐ工夫」として「実感する楽曲活用」、「広げ深める家庭学習」、「自覚できるワークシート」の三つに整理した。

「授業と日常生活をつなぐ工夫」は学年や時期、領域や題材に関わらず、授業のねらいや生徒の実態に応じて取り入れることができる。この工夫を取り入れることで、例えば、生徒が、授業で学んだリズムの特徴を日常生活に結び付けて音や音楽への興味・関心を広げたり、自分の好きな楽曲と授業で学ぶ楽曲の特徴を結び付けて学びを深めたりすることが期待できる。

(2) 「授業と日常生活をつなぐ工夫」の取り入れ方と期待される成果

ア　「実感する楽曲活用」

教材に複数の楽曲を選択し、そのうち１曲は、ポピュラー音楽など生徒が日常的に親しん

でいる楽曲とする。また、題材のねらいに応じて、複数の楽曲に共通する要素を知覚・感受して、それぞれの楽曲の表現を創意工夫したり、よさを味わったりする学習活動を行う。このことで生徒は、授業で初めて取り組む楽曲と、日常生活でよく聴く楽曲の間に、曲想と要素との関係において共通点があることを実感する。

イ　「広げ深める家庭学習」

前時で学んだ曲想と要素との関わりに着目して、日常生活で様々な音や音楽を聴くなど、家庭学習において、生徒が、音楽的な見方・考え方を働かせる場面を指導計画に位置付ける。このことで生徒は、授業で取り組んだ楽曲以外の音や音楽にも音楽的な見方・考え方を働かせて接し、その関わりを広げたり、深めたりすることができる。

ウ　「自覚できるワークシート」

家庭学習を含めた題材全体をワークシート１枚にまとめ、生徒が自分の感じたことや考えたことを振り返ることができるようにする。また、題材のまとめでは、それまでの記載を振り返る場面を位置付ける。このことで生徒は、自分の感じ方の深まりを実感し、学んだことの意味や価値を自覚できるようになる。

４　検証授業及び検証授業の分析

(1) 検証授業の概要

開発した指導の工夫の有効性を検証するため、都内公立中学校１校の第２学年生徒110名を対象にＡ表現及びＢ鑑賞の領域において検証授業を実施した（**表１**）。

表１　検証授業の概要

領域	Ａ表現	Ｂ鑑賞
題材の目標	曲想と音型との関わりを生かして、歌唱表現を創意工夫する。	曲想と音楽の構造との関係を捉え、物語と融合した音楽のよさを味わう。
第１時の目標	二つの楽曲の共通するテクスチュアを知覚・感受して、曲想とテクスチュアとの関わりを理解する。	映画と歌舞伎の、場面に応じた音楽の特徴を知覚・感受して、曲想と音楽の構造との関わりを理解する。
	（家庭学習）第１時で学んだテクスチュアや、旋律の特徴がある楽曲を探し、記録する。	（家庭学習）第１時で学んだ曲想とリズムや速度との関係に着目して、場面や物語を演出する音楽を探し、記録する。
第２時の目標	曲想とテクスチュア及び旋律との関わりを生かして、思いや意図をもって歌唱表現を創意工夫する。	物語と融合した音楽表現の共通性や固有性について考え、それぞれの音楽のよさを味わう。

(2) 検証授業の分析

表現の授業では、二つの楽曲に共通する要素の知覚・感受を基に歌唱表現を工夫する姿が見られた。鑑賞の授業では、他の生徒が家庭学習で収集してきた楽曲を聴き、曲想と要素との関係について考えを広げる姿が見られた。どちらの題材でも、約80％の生徒が、授業や日常生活で関わる様々な音や音楽に対し、楽曲の要素に着目して自分の考えを記述したり、感じたことを記録したりしていた。また、音や音楽との関わりに変化があったか書かせたところ、曲想と要素との関係に着目するようになったなどの記述が見られた（**表２**）。

表２　「授業と日常生活をつなぐ工夫」と、検証授業で見られた生徒の発言例

□授業と日常生活をつなぐ工夫 ☆期待される成果	★検証授業で見られた生徒の発言例
□実感する楽曲活用 ☆生徒が、授業で初めて取り組む楽曲と、日常生活でよく聴く楽曲の間に、曲想と要素との関係において共通点があることを実感する。	★歌舞伎の音楽も、映画の音楽も、緊迫感のある場面ではテンポが速く、リズムが細かい音楽が使われている。 ★合唱曲も、ポピュラー音楽も、サビに向かう場面では盛り上がる感じがする。伴奏の音の高さが上がっていくからそう感じる。
□広げ深める家庭学習 ☆生徒が、授業で取り組んだ楽曲以外の音や音楽にも音楽的な見方・考え方を働かせて接し、関わりを広げたり、深めたりする。	★アニメのテーマ曲が、リズムやテンポを変えて色々な場面で使われていた。旋律が同じでも、リズムやテンポが違うことで受ける印象が大きく変わった。 ★英語の授業で歌っている楽曲の、同じ形の旋律が２回連続して３回目には変化していた。合唱曲と同じような特徴があった。
□自覚できるワークシート ☆生徒が感じ方の深まりを実感し、学んだことの意味や価値を自覚できるようになる。	★音楽の盛り上がりによって物語の盛り上がりも変わることを実感した。楽曲なしで歌舞伎や映画を見るより、楽曲があった方が物語により入り込める。 ★音楽は何となく聴いていたけれど、伴奏の音型や旋律の連続に着目することでもっとその音楽が好きになった。歌詞ではなく楽曲に注目するようになった。

これらのことから、生徒が音楽的な見方・考え方を働かせて授業や日常生活で音や音楽と関わろうとするようになったと捉えた。また、ワークシートを活用することによって生徒が自己の変容を実感したことで、音楽科の学習の意味や価値を自覚できたと考える。

第４　研究の成果

「授業と日常生活をつなぐ工夫」を題材に位置付けたことで、生徒は授業の学びと日常生活の音や音楽との関わりを結び付け、音楽的な見方・考え方を働かせて授業や日常生活で音や音楽と関わろうとした。また、ワークシートの記述を振り返り、授業を通して自分の音楽の聴き方が変わったと記述したり、発言したりする姿から、生徒は音楽を学ぶ意味や価値を自覚していると捉えた。本研究における指導の工夫は、身の回りの音や音楽と豊かに関わる生徒を育成するために有効であると考えられる。

第５　今後の課題

１　ワークシートにおける指導と評価の一体化

検証授業では、生徒の曲想と要素との関係についての理解度が、家庭学習やその後の学びに大きく影響した。題材の中でワークシートを回収して、生徒の記述の内容から理解の状況を評価し、授業の各段階で的確な支援・指導を行う。

２　カリキュラム・マネジメントの充実につながる「授業と日常生活をつなぐ工夫」の活用

前後の題材を工夫したり、他教科と連携したりして「授業と日常生活をつなぐ工夫」を系統的に取り入れ、カリキュラム・マネジメントの充実につなげることで、研究を深めていく。